

**大学****アーカイブズ**

全国大学史資料協議会東日本部会会報

2009.11.10 No.41

Eastern Japan Section, The Japanese  
Association of College and University  
Archives

## 目 次

・松崎彰「講演・大学史資料保存運動としての東日本部会の活動」.....	1
・西山伸「講演・東日本部会の活動の歩みと現状」.....	4
・桑尾光太郎「椿田卓士氏「東海大学学園史資料センターにおける 資料整理の現状と課題について」を聞いて」.....	5
・全国大学史資料協議会東日本部会2009年度総会議事録（抄）.....	7
・全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録（抄）.....	8
・全国大学史資料協議会東日本部会研究会記録（抄）.....	12
・全国大学史資料協議会東日本部会規約.....	14

2009年5月28日(木) 全国大学史資料協議会東日本部会2009年度総会

**講演・大学史資料保存運動としての東日本部会の活動**

講師：松崎 彰（成蹊学園史料館・元中央大学）

**はじめに**

東日本部会の20周年に際し、記念誌『全国大学史資料協議会東日本部会 二十年の歩み』の刊行によせて開催された本年度の部会総会に参加できたことを、非常にうれしく思っております。

さて、本日は村松さんが記念誌の編纂について報告し、西山さんが東日本部会の研究活動をとりあげてくださるということですので、私は主に大学史資料の保存運動としての側面についてお話をしたいと思います。すなわち、東日本部会が何を目指して活動し、いかなる成果をえたのか、残された課題は何か、といった点を私なりにまとめることによって、活動の一端に触れてみたいと考えております。

**東日本部会の目指したもの**

東日本部会の歴史を概観すると、部会活動の目標は、協議会の名称変更にほぼ対応して

いることがわかります。

本会が「関東地区大学史連絡協議会」として設立されたのは1988年6月のことですが、その準備は1986年10月から開始されており、約2年間にわたって種々検討を重ねております。この時期が本会の草創期となるわけですが、そこでは活動の基本となる3つの方針が確認されています。すなわち、(1)活動にあたっては、国公立や私立、教員や職員、「私大連」や「私大協」といった区別をもうけない、(2)当面は大きな組織に加入せず独自の活動を展開する、(3)将来的には全国組織化を展望する、の3方針です。これは、準備会に集まつたメンバーが、歴史学や教育史、図書館学やアーカイブズ学といった多様な出自の教職員であったため、必要とされた確認でした。また、大学の年史編纂や資料保存に携わる人々が、組織的にも個人的にも非常に不安定な立場に置かれていた点を考えれば、大



学固有の問題を話し合う全国的な組織を目指したのは当然のことといえるでしょう。

基本方針を確定した上で、「関東地区大学史連絡協議会」が発足します。この名称は、1993年5月までの約5年間続きますが、同期の活動は、(1) 大学における年史編纂や資料保存の実態把握、(2) 全国組織化、が目標とされました。初期の研究会は、会員校の実態報告を中心とし、その成果をまとめた会報『大学アーカイブズ』が1989年1月に創刊されて、会員間の情報交換を活性化させました。また、西日本の各大学へも積極的に働きかけた結果、1990年5月には「西日本大学史担当者会」が設立されています。そして、同担当者会の設立をふまえ、1993年1月には「大学史編纂と資料保存に関するアンケート調査」実施を決定し、初めて全国的な実態調査に乗りだすことになります。

これらの活動のなかで、特筆すべきは全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編『記録と史料』第3号（1992年8月）に掲載された澤木武美他「大学史編纂と資料の保存—現状と課題一」です。この論文は、大学史資料が年史編纂だけでなく研究・教育他の幅広い分野で活用されるべき点や、各大学が個性ある大学資料館（アーカイブズ）を持つべき点を、協議会全体の目標として提起したものであり、資料保存運動としての性格をより強調した内容となっております。

一方、「関東地区大学史連絡協議会」と「西日本大学史担当者会」は、合同研究会等を通じて交流を深め、全国組織化を目指しました。1993年5月には「関東地区大学史連絡協議会」が「東日本大学史連絡協議会」と改称され、以後1996年10月までの約3年半、両会合同に向けた検討が続けられます。その意味で、準備会や「関東地区大学史連絡協議会」時代に目標とされた活動基盤整備の問題が、この時期によく解決の目処がついたということができるでしょう。

このようにして、1996年10月には「全国大学史資料協議会」が設立され、「東日本大学史連絡協議会」は「全国大学史資料協議会東日本部会」と改称されます。同協議会は、東西両部会の連邦制的な結合からなり、大学史編纂や大学史資料の収集・保存・活用を研究する協議会として発足しました。全国組織化の実現により、東日本部会の活動も本格化し、上記論文で提起した目標を実現すべく、様々



講演する松崎 彰氏

な企画や改革が実施されます。なかでも、研究会活動は、年度ごとに研究テーマを設定し、会員校の希望にも配慮した運営をおこなう方式に変化し、2000年3月には、シドニー大学アーキビスト、ケニス・スマス氏の講演を掲載した『研究叢書第1号シドニー大学アーカイブズ』を創刊することによって、研究成果発表の場も整えられました。また、2005年12月には『日本の大学アーカイブズ』を刊行して、各大学の活動や所蔵資料、研究成果等を公開するとともに、現在は、多くの大学が協力して大学自身の歴史を紹介する初の試みとして、「大学史展」の準備が進められています。研究の質を高め、運動全体のレベル向上をはかることに重点が置かれたのが、同期の最大の特徴です。

他方、「IT化」を積極的に活用した活動も展開されております。従来は、手紙による連絡、パンフレットによる広報が主流でしたが、2005年10月会員間の情報交換や事務連絡用に「東日本部会メールマガジン」を配信はじめました。さらに、2008年にはメールマガジンを発展解消して「全国大学史資料協議会ホームページ」を開設し、広く情報の公開や共有に活用しております。

最後に、関連機関との交流を進めるという目標がありますが、正直なところ、これはあまりうまく進んでおりません。全国歴史資料保存利用機関連絡協議会や企業史料協議会他の関連団体や、学内外の図書館・博物館他の機関との交流は今後の課題であると、私は考えております。

### 活動の成果と課題

東日本部会20年の活動を通して、私たちは多くの成果をえ、課題を確認できるようにな

りました。大学における資料保存の実態や環境が明らかになるにつれて組織や人員の問題が重要視されるようになり、単独のアーカイブであれ複合館であれ、恒常的組織や専門的知識をもったスタッフをもたなければ継続的な資料保存は難しいという認識は、大学アーカイブズや資料館等を設立する大学の増加傾向となってあらわれております。また、各大学の活動が広く情報交換されることによって、百年史その他の出版物をはじめとして展示・講演・自校史講座等々の諸事業が標準化され、レベルアップが図られていることも、周知の事実といえましょう。

さらに、近年では「大学史資料の性格」をメインテーマとする研究会活動が、継続的に開催されるようになり、「大学史資料」の範囲や全体像も徐々に明らかになってきました。<図1>は、本年3月まで私が勤務していた大学の現状組織をまとめた図ですが、そこに登場する組織や個人の活動により、「大学史資料」が生成されることをあらわしています。「大学史資料」が、いかに複雑で多様性をもった組織史料であるかは、この一例からも窺えると思います。なかでも、「教授会の自治」という原則との関連で、組織史料中に多くの私文書が含まれている点は、「大学史資料」の大きな特色となっております。そして、言う

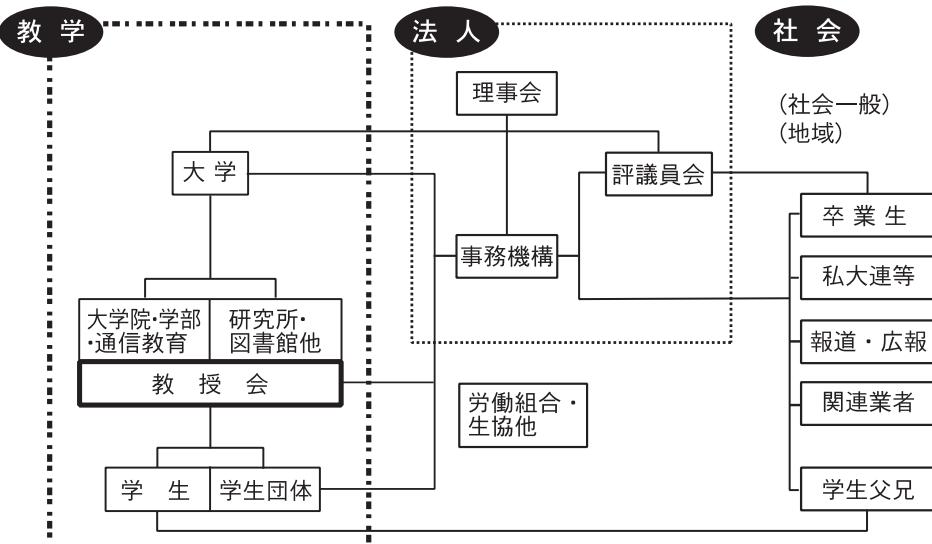
までもないことが、「大学史資料」の範囲は、各大学の組織的な差異だけでなく、時代によっても異なります。資料の範囲は、歴史的に変化するというわけです。

「大学史資料の性格」が徐々に解明されてくると、新たな課題も生まれてきます。資料保存の問題にひきつけていようと、今後は「資料管理の方法論」を検討する必要に迫られてゆくだろうと、私は考えております。時間の都合で詳細な説明はできませんが、検討の具体的なポイントとしては、(1) 資料収集時に資料の全体像を把握可能にする登録法や受入れ体制、(2) 「IT」化にともない分類と検索の概念を区別する必要性、(3) 資料の素材に対応した保管体制、(4) 個別大学の枠を超えた活用体制の構築、といった点が重要になってくるのではないかでしょうか。

これらの成果や課題は、社会的な運動という観点から見れば、いまだ端緒的なレベルにとどまっているといわざるをえないのですが、直面する課題を一つ一つ克服し、さらなる成果を目指して努力を続けることによって、将来的には大きな飛躍に結びつくものと信じております。

以上、大雑把ではありますが、東日本部会の活動を大学史資料の保存運動としての側面からご紹介いたしました。

<図1> 大学組織例と大学史資料



## 全国大学史資料協議会東日本部会2009年度総会

## 講演・東日本部会の活動の歩みと現状

講師：西山 伸（京都大学大学文書館）

## はじめに

筆者の本会入会は1996年のことであり、20年に及ぶ本会の歴史のうちたかだか半分あまりを一員として経験したにすぎない。その意味では、『二十年のあゆみ』の編集委員に加わったり、表記のようなテーマで講演したりするにはふさわしくないとも思われる。しかし、一方ではある程度本会について客観的に見ることができるかもしれない、できるだけそのような視点から、研究活動を中心とした本会の歩みと現状を考えてみることにした。



講演する西山 伸氏

## 1 年史編纂

日本の大学における年史編纂は、1980年代に入って一挙に本格化した。総頁数が3000から1万前後に及ぶ大規模な年史が珍しくなくなっただけなく、内容についても歴史の編纂物として批判に堪えうるものが数多く刊行されるようになってきた。それに伴って各大学の年史編纂組織は充実していったのであり、それが本会設立の背景となっている。したがって、本会の研究会活動の中に年史編纂の経験についての情報交換や、編纂組織の後身としての資料室設置の経緯についての報告が位置づけられたのは自然なことであった。しかし、各大学の編纂経験を総括し、一般化して実践に生かそうとする試みは本会の活動の中ではあまり行われていない。編纂・刊行状況が落ち着きを見せてきている現在こそ、これまでの年史編纂に関するまとめを行う必要があると考えられる。

## 2 資料論

大学に関する歴史資料の収集・整理・保存・公開は、本会に所属する多くの機関会員にとって基本的な業務であり、資料論が本会の研究活動において重要な位置を占めるのは当然のことであろう。本会の研究活動における資料論は、資料の修復保存に関わる議論、研究等への資料の利用に関する議論、資料の収集・整理・公開に関する議論に分けることができる。近年の全国研究会でも「年史資料の収集・保存」(1999年度)、「大学史資料をめぐる現

状と課題」(2002年度)、「大学史資料の公開と活用」(2005年度)、「創立期大学史資料の特色」(2007年度)と相次いで資料論が取り上げられている。また、最近では資料のデジタル化・コンピュータ利用や、大学全体の文書管理と関わった資料のあり方についても本会の研究活動で扱われるようになってきている。

## 3 展示論

資料収集・整理や研究の成果としての大学史展示を行う会員校は少なくない。しかし、従来研究会の中で大学史展示に関する事例報告や情報交換は二、三の例外を除き行われておらず、個々の会員校の経験を理論化・一般化して共有することは今後の課題となっている。特に会員校で実施されている大学史展示の多くは大学全体の通史的展示であり、大学の歴史的側面における「顔」の役割を期待されているものと言え、それぞれの大学での活動のためにも会員校の横のつながりが生かされるべきであろう。その意味では、2010年1月・2月に開催予定の本会主催の全国大学史展「日本の大学—その設立と社会—」が一つの契機となることが望まれる。

## 4 自校（史）教育論

近年、会員校に限らず、学生に対して自らの大学（の歴史）についての講義を行うところが増えてきており、大学アーカイブズがその主体となっていることも珍しくない。「建

学の理念」に基づく教育が大学のアイデンティティに関わる度合いの強い私立大学の方が、自校史教育においては先行していたが、最近では私立国立を問わず広がる傾向にある。しかし、本会においては、自校史教育は必ずしも積極的には取り上げられていない。そもそも学生にそういった教育を行う目的は何なのか、どのような内容がふさわしいのか、近年本会の外で取り上げられることが多い自校史教育だが、本会でも一度本格的に議論すべきかもしれない。

## 5 アーカイブズ論

本会において「アーカイブズとは何か」について本格的に議論され始めた契機は、2001年の「行政機関の保有する情報の公開に関する法律」（情報公開法）の施行であった。国の機関における行政文書の厳密な管理と、その管理に基づいた国民への情報開示を柱としていた同法は、いわゆる現用文書のみを対象としていたが、一部の国立大学ではこの機会に非現用となった文書についても歴史的資料として保存・公開していく場が必要であるとの議論が起こり、大学文書館（大学アーカイブズ）が誕生するに至った。このような大学アーカイブズでは、その主要業務は「文書のライフサイクル論」に基づいて組織運営のた

めの資料を取り扱うことであると位置づけられ、従来の年史編纂終了後の資料保存・利用という資料室の役割に、新たな見方が提示された。本会が2005年に刊行した『日本の大学アーカイブズ』も、こうした議論を踏まえたものであった。だが、同書においても「大学アーカイブズとは何か」については結局明示できおらず、なぜ大学にアーカイブズが必要なのか、その理念的裏づけについてさらに検討を重ねていくことは、引き続き本会の課題になっていると思われる。

## おわりに

2009年6月に「公文書等の管理に関する法律」が成立した。年金記録の不備など、近年次々と露わにされた公文書のずさんな管理という負の側面が同法成立の直接の契機ではあるが、文書の管理に対する社会の関心がこれほど高まっているのは前例のことである。それだけ現在は文書、アーカイブズの重要性が増しているのであり、国立私立を問わず日本の大学全般にもその波は押し寄せていると言えよう。創立20年を迎える、「成人」に達した本会の果たすべき社会的役割も今後ますます大きくなることが考えられる。これまでの歩みを継承しつつ、様々な議論をさらに深めていくことが本会に求められているであろう。

2009年3月19日(木) 研究会

## 椿田卓士氏 「東海大学学園史資料センターにおける 資料整理の現状と課題について」を聞いて

学習院アーカイブズ準備室 桑尾 光太郎

アーカイブズと称される部署において、最も重要な業務が所蔵資料の整理にあることは論をまたない。学内の各部局から移管され、あるいは卒業生や旧教職員から寄贈を受けた資料も、何が入っているかを確かめ要望に応じて出納できるようにしておかなければ、所蔵する意味がなくなる。所蔵資料がどれだけ整理されているかは、アーカイブズとしての信用にも大きく関わってくる。とはいっても資料の整理は地道かつ骨の折れる作業であり、日々舞い込んでくる仕事に担当者が追われて後回しにされがちである。筆者が座っている席の背後にも未整理資料が段ボールに入ったまま放置され、たまにその存在を思い出して愕然

とすることがある。

報告者の椿田卓士氏、同じく学園史資料センターの馬場弘臣氏は、近世地方史研究や自治体史編纂の経験を豊富に持っている。近世史研究には粘り強い史料の調査と整理が不可欠であり、その力強さが学園史資料センターの業務にも取り入れられている。椿田氏の報告は1時間を優に超える精力的なもので、かつきわめて具体的でわかりやすく、整理作業に携わる者にとって貴重な機会となつた。

学園史資料センターにおける資料整理の基本的な流れは以下の通りである。

1. 資料の受け入れ…「受入原簿」への記入
2. 仕分け・第1次選別…既収集分や余剰

### 分の除去

3. 整理作業…「受入台帳」に登録、資料番号の付与
4. 第2次選別…不用な梱包・金属部品などの除去
5. 資料の配架…アーカイブズ・ボックスへの収納、「ボックス管理台帳」への登録、「整理原簿」への登録

報告の内容はすでに「学園史資料センターの整理作業」（『東海大学学園史ニュース』2、3号）にまとめられている。今回の報告および配布資料でも、整理作業の各場面で「何をどうすべきか」が具体的に解説されているため大いに参考となった。たとえば資料の受け入れ時に作成する「受入原簿」「受入台帳」において、入力する各項目について記入の要領や、なぜこの項目をとるのかという意味が丁寧に解説されていた。資料の仕分けや選別を行う段階の作業についても明快な説明が加えられ、実際に作業を行う段階での指針となる。配布資料の「主な資料保存器財一覧」も参照させていただくことになるだろう。

整理した資料を段ボール箱ではなく、アーカイブズボックスに入れて架蔵する方法も参考になった。筆者の職場では、古文書を整理する要領で中性紙封筒に一点ずつ資料を挿入し、それを段ボール箱に収納する方法をとってきた。封筒を使えば各資料に直接ラベルを貼らずに済む利点はあるが、資料の容積は確実に大きくなる。アーカイブズボックスは、段ボール箱に比べると出し入れがしやすく、各資料がどこにあるかの認識がわかりやすいし、封筒を用いるよりもスペースを使用せずに済む。

筆者は2005年、東海大学学園史資料センターを訪問し、同窓会館内の作業スペースや収蔵庫を見学したことがある。かつてボウリング場であった建物を利用したため、床やカウンターなどにその名残りがあること、元来はビルケース用の移動式物品棚が資料の収納にも機能的であること、北条秀司関係資料など個人資料が整然と整理・収蔵されていたことなどが記憶に残っている。資料の受け入れ件数は2006年度で164件に達しているが、椿田氏は学内各部署からの事務文書の移管はあまり進んでいないと報告されていた。行政機関や国立大学において進められている規定に基づく組織文書の系統的な保存は、私立大学の間で実現しにくい課題である。私大には行政機



報告する椿田 卓士氏

関や国立大学法人のように情報公開の義務がなく、公文書管理法の影響も未知数である。したがって現用・非現用を問わず事務文書の整理が滞りがちであるし、私大のアーカイブズ・セクションに膨大な量の組織文書を管理できる体力があるかという問題もある。けれども重要なのは、学内各部署とアーカイブズ・セクションとの信頼関係の構築と筆者は考える。学園史資料センターの場合、受け入れ資料に責任をもって選別・整理・保存を行うことによって、卒業生や元教職員だけではなく学内各部署からの信頼関係を着実に深めつつあると見受けられる。

今回の報告内容は、おそらく学園史資料センターの内部で相当の試行錯誤と議論を経て練り上げられたものであろう。椿田氏が述べられたように、整理作業にがっちりとしたマニュアルは存在しない。それぞれのアーカイブズの活動方針や予算、マンパワー、資料の性格や保管される環境によって異なるであろう。筆者の業務にとっても東海大学の資料整理法は格好のお手本であり、真似できる部分はすぐに取り入れる所存であるが、もちろんその過程で独自の方法を編み出す部分も出てくるであろう。今回のように詳細な説明が行われた事例を参照できると、「ではどのように自分なりにアレンジすればよいか」が想起しやすい。

資料の状態を気にしながら、思うように調査や整理が進まない部署は数多いと思われる。今回の研究会を機に、それぞれの担当者が実務を行なうまでの引き出しを増やし、情報交換を進めていく様子が頼らしく見える。

### 《追記》

2009年8月14日、東海大学課程資格教育セ

ンターの日露野好章准教授が逝去された。日露野氏は東海大学学園史資料センターの前身である東海大学50年史編纂室・同資料室に勤務され、全国大学史資料協議会においても研究や会運営のさまざまな局面で活躍された。筆者が大学史編纂の仕事を始めた頃、日露野氏は『東海大学五十年史』の編纂を終えられた直後で、資料の調査・整理をはじめ作業の

手順について惜しみなく助言を与えてくれた。そして幾度となく、「大変だけど、頑張ってね!」と声をかけていただいた。博物館とアーカイブズとを横断する幅広い活動を展開し、学生の指導にも親身にあたられていただけに、48歳の若さで亡くなられたことは痛恨の極みである。謹んでご冥福をお祈りします。

\* \* \* \* \*

### 全国大学史資料協議会東日本部会 2009年度総会議事録(抄)

日 時 2009年5月28日(木)15時～17時30分  
 会 場 東京経済大学 国分寺キャンパス  
         6号館7階大会議室  
 部会総会の成立  
 \*現会員数と出欠状況  
 名誉会員  
     <総計>3 <出席>0 <欠席届>0  
     <未回答>3  
 機関会員  
     <総計>62 <出席>29 <欠席届>25  
     <未回答>8  
 個人会員  
     <総計>27 <出席>4 <欠席届>13  
     <未回答>10  
 総計  
     <総計>92 <出席>33 <欠席届>38  
     <未回答>21  
 \*総会定数は、機関会員62(休会会員を除く)の過半数=32である。  
 \*部会規約11条第5項にもとづき、欠席届を総会議長への委任状とするため、出席(29)と欠席届(25)の合計は54となり、部会総会は成立した。  
 出席会員 青山学院 神奈川大学 関東学院  
         慶應義塾 恵泉女学園 皇學館  
         國學院大學 国士館 芝浦工業大学  
         上智大学 女子美術大学 成蹊学園  
         聖路加看護大学 専修大学  
         創価大学 拓殖大学 中央大学  
         東海大学 東京経済大学  
         東洋学園大学 東洋大学 東洋大学  
         校友会 日本女子大学 日本大学  
         宮城学院 武蔵野美術大学  
         明治学院 明治大学 立教大学  
         青柳小百合 中村 青志 西山 伸  
         松崎 彰 (出席者合計45名)

- 開会の挨拶 鈴木 秀幸氏  
 (会長・明治大学史資料センター)  
 会場校挨拶 久木田重和氏  
 (東京経済大学学長)  
 議長の選出 議長 馬場 弘臣氏  
 (東海大学学園史資料センター)  
 副議長 土屋 昌子氏  
 (恵泉女学園史料室)  
 議 事 1. 2008年度事業報告書・同決算報告について  
 昨年度事業報告につき、事務局(武蔵野美術大学)から配布資料「2008年度事業報告書」に基づいて事業報告があり、次いで、会計委員(東洋大学校友会)から配布資料「2008年度収支決算書」に基づいて収支決算が報告された。次いで監査委員(慶應義塾)から決算が適正であった旨の監査報告が行われ、各報告の通り満場一致で承認された。  
 2. 2009年度事業計画案・同予算案について  
 本年度事業計画案につき、事務局(武蔵野美術大学)から配布資料「2009年度事業計画書(案)」に基づいて概説的な説明があった後、「『全国大学史展』の企画準備」について実行委員長西山伸氏(京都大学)から進捗状況について補足がなされた。続いて、会計委員(東洋大学校友会)より配布資料「2009年度予算書(案)」に基づいて説明があり、審議の結果、事業計画、予算とも原案通り満場一致で承認された。  
 3. 東日本部会規約の一部改正案について

事務局（武蔵野美術大学）から「東日本部会の体制・業務の見直し検討委員会による体制の見直し検討の結果、規約の一部改正案が作成された。幹事会の議を経て本日お諮りする」との経過説明の後、東日本部会規約の一部改正について配付資料「全国大学史資料協議会東日本部会規約新旧対照表（案）」に基づいて説明があった。審議の結果、規約の一部改正について満場一致で承認された。

また、事務局（武蔵野美術大学）から「体制見直し検討の中で、名誉会員について内規を定めたので報告する」との説明の後、配付資料「東日本部会名誉会員内規（案）」に基づいて報告があった。

#### 4. その他 特に無し。

**閉会の挨拶** 澤木 武美氏（副会長・神奈川大学大学資料編纂室）

**講演会『全国大学史資料協議会東日本部会二十年の歩み』刊行記念**

- ・村松 玄太氏（編集委員会主査・明治大学）  
「『二十年の歩み』の編集経緯について」
- ・松崎 彰氏（中央大学）  
「東日本部会の設立と大学史資料保存運動」
- ・西山 伸氏（編集委員・京都大学）  
「東日本部会の研究活動とその背景」

**概 要** 村松氏は、『二十年の歩み』の編集経緯、編集方針・内容構成等について述べられた。

続いて松崎氏は東日本部会のこれまでの活動を準備会時代、関東地区大学史連絡協議会時代、東日本大学史協議会時代、全国大学史資料協議会東日本部会時代に区分して述べた後、その運動の成果と課題を提起された。

最後に、西山氏が、東日本部会の活動の歩みと現状について年史編纂、資料論、展示論、自校（史）教育論、アーカイブズ論の5つについて触れられ、公文書管理に対

する社会の関心の高まり、文書の様々な役割など、今後のアーカイブズの可能性について述べられた。なお、講演の内容については、会報『大学アーカイブズ』に掲載予定である。（市村麻衣）

#### 情報交換会

東京経済大学6号館7階ラウンジにおいて情報交換会を開催した。会場校である東京経済大学の中村青志氏から開会の挨拶があり、皇學館の大平和典氏が乾杯の音頭をとった。新規入会会員、初参加者の挨拶の他、部署名変更挨拶や情報提供依頼など和気あいあいの雰囲気の中、情報交換を行った。なお、司会進行役は成蹊学園史料館の伊藤昌弘氏が務めた。

### 全国大学史資料協議会 東日本部会幹事会議事録（抄）

第92回 2009年3月19日（木）12時～13時30分  
会 場 武蔵野美術大学

新宿サテライト roomE  
出 席 神奈川大学 慶應義塾 國學院大學  
成蹊学園 大東文化大学 東海大学  
東洋大学校友会 武蔵野美術大学  
明治大学 中村 青志 西山 伸

議 事 1、2009年度部会総会について  
事務局の武蔵野美術大学の石田氏より、2009年度部会総会は東京経済大学を会場校とする方向で打診し内諾を得た旨の説明があり、諮った結果、了承された。なお、開催日は5月28日（木）と決定した。

事務局より資料Aを基に、東日本部会の2009年度事業計画書（下案）の説明があった。審議の結果、協議会ホームページへの会報『大学アーカイブズ』の掲載を追加することになった。

2009年度役員については、2008年度と同じ体制で臨むことを総会に諮ることになった。

#### 2、2009年度研究会について

事務局より資料Bを基に、東日本部会研究会のこれまでの年間テーマについての説明があり、4月の幹事会で引き続き審議することと

なった。

### 3、2009年度総会・全国研究会について

会場校の國學院大學の益井氏より、國學院大學において会場使用料が発生することになったことの経緯が説明された。審議の結果、使用料支払いは過去にもあり、予算的にも対応可能であるので、予定通り國學院大学を会場とすることを確認した。

事務局より資料Cを基に、これまでの全国研究会の統一テーマ、開催方法について説明があり、4月の幹事会で引き続き審議することとなった。

### 4、その他

- 本日開催研究会の運営及びオブザーバーの参加について

研究会担当の東海大学の馬場氏より、第65回の研究会についての説明があった。また会場で次年度研究会に関するアンケートを行うことが報告された。

事務局から、聖路加看護大学図書館の本日の研究会へのオブザーバーとしての参加の申出があったことが報告され、了承された。

- 『二十年の歩み』編集報告  
主査の明治大学の村松氏より、刊行が4月になるとの報告があった。
- 『会報40号』編集報告  
会報担当の神奈川大学の齊藤氏より、会報は現在3回目の校正に入っている、今月中の刊行が見込めるとの報告があった。
- 「大学史展」ワーキンググループ進捗報告  
実行委員会委員長の西山氏より、3月6日に第5回ワーキンググループ会議が行われ、展示物の方向性が決定してきたとの報告があった。現在、会員に貸与可能な創立期資料に関するアンケートを行っているとの説明もなされた。また、次年度の研究会で会員の意見を聞きたいとの要望が出された。
- ホームページトップページの変更完了報告

ホームページ担当の成蹊学園の伊藤氏より、トップページの変更が完了したとの報告があった。

• 東日本部会幹事会議事録の西日本部会幹事校への送付について  
事務局より、1月幹事会で東西両部会間のより一層のコミュニケーションを図ることを決定し、その後、東日本部会会长の明治大学から西日本部会会长校の同志社大学に経緯を説明し了承を受け、窓口担当校の武蔵野美術大学から桃山学院にも経過説明をした後、西日本部会幹事校に1月開催の東日本部会幹事会議事録をメール送信したとの報告があった。

第93回 2009年4月23日(木)14時～16時20分  
会 場 武蔵野美術大学

新宿サテライトroomE  
出席 神奈川大学 國學院大學 成蹊学園  
大東文化大学 東海大学 東洋大学  
校友会 日本大学 武蔵野美術大学  
明治大学 中村 青志 西山 伸

議 事 1. 2009年度部会総会について  
\*事務局（武蔵野美術大学）より総会及び講演会の概要について説明があり、審議の結果了承された。  
次いで、2008年度事業報告・2009年度事業計画(案)・2009年度役員(案)・東日本部会規約の一部改正(案)について説明があり、審議の結果了承され、総会に諮ることとした。

\*会計委員（東洋大学校友会）より  
2008年度収支決算・2009年度予算案について説明があり、審議の結果了承され、部会総会に諮ることとした。

2. 2009年度研究会について  
\*研究会企画・運営担当（東海大学）  
より、3月19日に実施したアンケート集計結果について説明があった。アンケートの集計結果、内容を生かして案出された2009年度研究会案について説明があり、審議の結果了承された。また、2009年度研究会の年間テーマを「大学史の展示」とすることも了承された。

3. 2009年度総会・全国研究会について  
 \*会場校の國學院大學より、開催期間を10月14日(水)～16日(金)とする提案があり、了承された。
4. その他
- ① 新規入会申し込みについて  
 申し込みのあった聖路加看護大学大学史編纂資料室の入会について、これを承認した。
  - ② 『会報40号』発行報告  
 会報編集・発行担当(神奈川大学)より、第40号を3月31日に発行した旨の報告があった。
  - ③ 『二十年の歩み』編集報告  
 編集委員会主査の村松玄太氏(明治大学)より、刊行に係る発送処理及び講演会内容の説明があり、審議の結果了承された。
  - ④ 「全国大学史展」ワーキンググループ進捗報告  
 「大学史展」実行委員長西山伸氏(京都大学)より、4月の会合で具体的な内容をつめる作業に入ったこと、今後は、3月に実施した創立期資料アンケート未回答分の督促をした上で、5月の会合及び実行委員会においてとりまとめ、7月の研究会で報告し会員からの意見を聞いて進める予定であることなどの報告があった。

第94回 2009年5月28日(木)13時～14時30分  
 会 場 東京経済大学 6号館7階中会議室  
 出 席 神奈川大学 慶應義塾 國學院大學  
       成蹊学園 東海大学 東京経済大学  
       東洋大学校友会 日本大学  
       武蔵野美術大学 明治大学  
       中村 青志 西山 伸  
 議 事 1、2009年度部会総会の運営について  
       \*未決であった担当者について審議し決定した。  
 2、2009年度研究会について  
       \*事務局(武蔵野美術大学)より、アンケートに寄せられた会員からの東日本部会の活動に対する意見の紹介があり、今後それらの意見も参考にしながら活動していくこ

- とした。
- \*研究会企画・運営担当(東海大学)より、2009年度の研究会について説明があり、未決であった各研究会の担当者等を審議し決定した。
- 3、2009年度総会・全国研究会について  
 \*全国研究会のテーマ等について議論されたが、今後はそれを受けて会長と事務局とでまとめ、その結果を各幹事にメールで諮ることになった。
- 4、その他
- ・新規入会申し込みについて  
 申し込みのあった愛知医科大学大学文書室の入会について、これを承認した。
  - ・『二十年の歩み』刊行報告  
 編集委員会主査の村松玄太氏(明治大学)より、『二十年の歩み』が刊行されたことと、関係機関へ750部(500件)を送付したことの報告があった。
  - ・「全国大学史展」ワーキンググループ進捗報告  
 「大学史展」実行委員長西山伸氏(京都大学)より、5月20日に行つたワーキンググループの会合で、展示方法や会場の警備等の具体的な話し合いがなされたとの報告があった。また、7月の研究会前(6月25日)に実行委員会を開催する予定であることが報告された。
  - ・『会報41号』の編集について  
 会報編集・発行担当(神奈川大学)の齊藤研也氏が欠席のため、次回に報告することになった。
  - ・ホームページへの投稿について  
 事務局(武蔵野美術大学)より芝浦工業大学からの情報提供願いの経緯について説明があり、ホームページに掲載する形で対応したとの報告があった。

第95回 2009年7月9日(木)13時～14時20分  
 会 場 明治大学 駿河台校舎アカデミーモン2階A2・A3会議室  
 出 席 神奈川大学 國學院大學 成蹊学園  
       大東文化大学 東海大学

東京経済大学 東洋大学校友会  
 日本大学 武蔵野美術大学  
 明治大学 中村 青志 西山 伸

**議 事**

1. 2009年度部会総会総括  
 ※事務局（武蔵野美術大学）より本年5月開催の部会総会について各担当において気の付いた点があれば次年度に生かしたいとの発言があつたが、特段問題点の指摘は無かつた。
2. 2009年度総会・全国研究会について  
 ※事務局（武蔵野美術大学）より、本年10月開催予定の総会・全国研究会の企画内容、時間進行について説明があり、説明された方向で準備をすすめることとなった。また研究会の準備会を9月17日(木)に國學院大學で開催することが審議の上、了承された。
3. 2009年度研究会について  
 ※事務局（武蔵野美術大学）より、本年度の各研究会について説明があつた。大学史展会期中の研究会（1～2月）については、当初、大学史展実行委員長の西山伸氏（京都大学）の報告を予定していたが、西山氏が全国研究会で報告するため、現在、講演者を検討中であることが報告され、審議の上、了承された。
4. 「全国大学史展」について  
 ※大学史展実行委員長の西山伸氏（京都大学）より、6月25日に開催された実行委員会の内容について報告があつた。
- ※大学史展実行委員の村松玄太氏（明治大学）より、展示に関して予想される諸費用、業務等が報告された。また展示会場の受付・監視は、原則として幹事校を中心とした会員各校が行なうことが審議の上、了承された。
- ※展示図録については次年度に刊行したいという提案が西山伸氏より出され、審議の上、了承された。
5. その他
  - ・入会申し込みについて  
 ※申し込みのあった工学院大学（創

立125周年記念事業事務室）の入会について、了承された。

- ・『会報41号』の編集について

※会報編集・発行担当の齊藤研也氏（神奈川大学）より、11月に刊行予定である会報の編集内容についての報告があつた。

- ・2010年度部会総会について

※事務局（武蔵野美術大学）より、2010年度の部会総会会場として愛知大学を候補に交渉を進めたいとの提案があり、審議の上、了承された。

第96回	2009年9月17日(木)12時～12時55分
会 場	國學院大學 渋谷キャンパス学術メディアセンター5階会議室06
出 席	神奈川大学 慶應義塾 國學院大學 大東文化大学 東海大学 東京経済大学 東洋大学校友会 日本大学 武蔵野美術大学 明治大学 中村 青志 西山 伸
<b>議 事</b>	審議前に、8月14日に逝去された個人会員の日露野好章氏に対して黙祷を捧げた。
1、全国大学史資料協議会規約の一部改正について	
事務局（武蔵野美術大学）より、本年5月の東日本部会規約改正に伴い、全国規約においても会員として個人会員を明記することしたいとの提案があり、審議の結果承認され、10月の役員会、全国総会に諮ることになった。	
2、2009年度総会・全国研究会の運営について	
未決であった担当者について審議し決定した。	
3、体会届の提出について	
体会届の提出があつた千葉商科大学と日本工業大学について、これを承認した。	
4、その他	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・シンポジウム等への後援について                      事務局より、情報保存研究会・日本図書館協会主催のシンポジウムと企業史料協議会主催のセミナーについて、それぞれ主催者から後援依頼があり、西日本部会と協議</li> </ul>	

- し、後援することとしたとの報告があつた。
- ・海外への『二十年の歩み』の寄贈について  
事務局より、ハワイ大学から『二十年の歩み』の寄贈依頼があり、送付したことの報告があつた。
  - ・ホームページの運営について  
事務局より、ホームページの管理運営方法について担当校（成蹊学園）が見直しの検討を進めている旨の報告があり、了承された。
  - ・「全国大学史展」について  
「大学史展」実行委員長西山伸氏より、9月中に展示品の最終絞り込みをすること、名称を「日本の大学 その設立と社会」とする方向であることの報告があつた。

### 全国大学史資料協議会 東日本部会研究会記録（抄）

第65回 2009年3月19日（木）14時～17時  
会場 武蔵野美術大学  
新宿サテライトroomA・B  
参加 青山学院 神奈川大学 慶應義塾  
國學院大學 芝浦工業大学  
上智大学 成蹊学園 拓殖大学  
大東文化大学 東海大学  
東京経済大学 東北学院  
東洋学園大学 東洋大学校友会  
獨協学園 日本体育大学 日本大学  
宮城学院 武蔵学園  
武蔵野美術大学 明治大学  
立教大学  
桑尾光太郎 中村 青志 西山 伸  
[オブザーバー]  
渡部 尚子  
(聖路加看護大学図書館)  
新沼 久美  
(聖路加看護大学) (以上36名)  
会長挨拶 鈴木 秀幸氏  
(明治大学史資料センター)  
研究会担当挨拶  
馬場 弘臣氏  
(東海大学学園史資料センター)  
司会 豊田 徳子氏 (東洋大学校友会)  
報告 植田 卓士氏  
(東海大学学園史資料センター)  
「東海大学学園史資料センターにお

### 概要

ける資料整理の現状と課題について」

全国大学史資料協議会東日本部会第65回研究会報告は、東海大学学園史資料センターの椿田卓士氏により、「東海大学学園史資料センターにおける資料整理の現状と課題について」と題して、当該センターが行なっている自校史関係資料の整理作業の流れとその具体的な作業内容に関する発表がなされた。

本報告では、大きく「I. 学園史資料センターの概要」、「II. 資料整理作業」、「今後の課題」の3つの構成からなり、まず「I. 学園史資料センターの概要」として、東海大学学園史資料センターの沿革や組織・施設・規則、主な活動に関する紹介がなされ、続いて「II. 資料整理作業」において、資料整理の流れとして、①「資料の受け入れ」→②「仕分け・第1次選別」→③「整理作業」→④「第2次選別」→⑤「資料の配架」の順に、各作業の具体的な内容に関する説明が行なわれた。

まず①「資料の受け入れ」では、「受入原簿」への記入とデータベース化を中心に、その記入要領と記入様式の一例を提示し、受入番号を年度で区切つてつけることを前提に、原則として一資料群について一受入番号を付与すること、また受入が複数回にわたっても、年度内であれば同一の受入番号をつけることなどの紹介がなされた。次の②「仕分け・第1次選別」では、「既収集分や余剰分の除却」として、「仕分け」では原則として受入年度の古い資料群から整理すること、及び「第1次選別」では同一資料が多数にのぼる場合は保存状態の良いもの3部を残して、あとは廃棄するといったことなどの説明がなされた。③「整理作業」は、「資料番号」の付与、及び「受入台帳」への登録・データベース化の説明で、個々の資料固有の番号となる「資料番号」を、原則1点（1レコード）に対して1つの番号を付与し、合わせて当該資料の種類（文書資料、写真資料、物品資料）にし

たがい、保管・保存のために使用する用品を判断すること、また「受入台帳」への登録要領と記入例が提示され、とりわけ記入例の末尾には「受入年月日」、「記入年月日」等の補足事項を設けて、これら事項により当該年度に受入ないし記入した件数の確認も同時に行なえるといったことの指摘がなされた。続いて④「第2次選別」は、「不要な梱包・金属部品等の除却」をはじめ、「第1次選別」の段階で処理できなかつた分をチェックとともに、あらためて登録済み受入台帳全体との照合を行い、かつ慎重を期すため、年度末に一度（3月）に当該年度整理資料のチェックも行なうことが説明された。そして⑤「資料の配架」は、受入台帳に入力した情報を、所定のカード書式にてシール印刷し保存用封筒に貼り付けるほか、ビデオテープやカセットテープ、CDなどの場合はケースと本体にラベルを貼ること、書籍の場合は封筒に入れるのではなく、情報を記した付箋を挟み込むこと、同様にレコードなども上部が開いて通気性を良くしたポリプロピレンの袋に付箋とともに入れて保管することなどが画像で紹介された。同様に、整理した資料を「アーカイブボックス」へ詰め替え、ボックスごとに管理番号を付与して、「ボックス管理台帳」へと登録・データベース化し、また「アーカイブボックス」はサンレール型移動棚に収納していくことも画像により提示された。

以上の東海大学学園史資料センターにおける資料整理作業の流れと具体的な作業内容から、最後に「今後の課題」として、学内の記録文書を体系的に収集するシステムを構築することや、資料収集基準を非専門家にもわかりやすく明確化すること、廃棄マニュアルを作成すること、資料の大量受入に対応した資料整理方法を確立することなど、9項目にわたる課題が提起された。なお、当該センターで使用している「主な資料保存器材一覧」を「参考資料」に、紙

類、封筒・フォルダー、資料保存箱といった種類別に、製品名とメーカー、また既製品か特注かといった補足説明もなされた。

発表後の質疑応答・意見交換では、まず①配架するまでの期間はどれくらいか、②資料の燻蒸処理は行なっているのか、③資料センターが発足したことで、学内からの問い合わせが増えたか、についての質問がなされた。これに対し、①資料の量にもよるが、1つの資料群に関して、基本的には年度内の作業を心掛けて、半年から1年以内に配架する、②燻蒸処理はしないが、資料の状態によっては「要脱酸」の表記をして業者に依頼する、③資料センターの発足により問い合わせや資料の持込みが2倍以上増え、とりわけ広報関係やレファレンスの問い合わせ件数が増加した、との回答がなされた。続いて専任の教職員を置かないことの不便さについてや、東海大学内での文書管理規程の有無と大量の文書保存についての質問がなされ、これに対し専任教職員を置かずとも業務上大きな支障はないこと、また文書管理規程はあるが、学内での浸透度は不明であり、かつ実際に大量の文書が移管した場合の体制は現状では整っていないとの回答であった。さらに①受入原簿への記入から受入台帳への登録までの流れのシステムについて、②受入原簿に記入した後の資料の配置について、③資料群に貴重資料が含まれていた場合の処理についての質問には、①受入原簿への記入と受入台帳への登録をリンクしたソフトを使用していること、②受入原簿に登録した後は、担当者の下に置いて資料の管理と状況把握を行なうこと、③貴重資料があっても、備考欄にその旨を記すのみとし、資料の状態はそのまま維持するとの回答がなされた。

なお、最後に司会から、今回の発表は資料整理のマニュアルを提示したもので大いに参考にすべきであり、特にこれから自校史資料の整理に着

手する機関にとっては最も参照すべきものとのコメントがなされた。  
(齊藤智朗)

第66回 2009年7月9日(木)15時～17時  
会 場 明治大学 駿河台校舎アカデミコ  
モン2階A2・A3会議室  
参 加 愛知大学 神奈川大学 恵泉女学園  
工学院大学 國學院大學  
国士館大学 自由学園 上智大学  
女子美術大学 成蹊学園 創価大学  
大東文化大学 拓殖大学 中央大学  
東海大学 東京経済大学  
東京女子医科大学 東洋学園大学  
東洋大学校友会 日本女子大学  
日本大学 武蔵野美術大学  
明治学院 明治大学 立教大学  
中村 青志 西山 伸 東田 全義  
(以上40名)  
会長挨拶 鈴木 秀幸氏  
(明治大学史資料センター)  
司 会 益井 邦夫氏  
(國學院大學校史・学術資産研究セ  
ンター)  
報 告 西山 伸氏  
(大学史展実行委員長・京都大学文  
書館)  
『全国大学史展』開催に向けて  
概 要 2010年1月15日～2月14日に開催  
予定である全国大学史展「大学の創  
立（誕生）」の進捗状況について、  
大学史展実行委員長の西山伸氏（京  
都大学大学文書館）より報告があつ  
た。

まず展示会場となる明治大学の特  
別展示室を見学した後、昨年3月に  
「大学史展」の中間報告として開催  
した研究会以降のワーキング・グル  
ープの活動経過の説明があった。す  
でに日程・展示場所・テーマは決定し  
ており、部会会員校へのアンケート  
の回収・集計までが行われている。  
今年6月の実行委員会においてアン  
ケートの結果をもとにさらに具体的  
な展示内容や経費、体制についての  
検討を行った。ワーキンググループ  
での話し合いの中で最も苦労した点  
は、何をもって「大学の設立」とす  
るのかということであり、これに多

くの時間を割いて話し合った。各大  
学がそれぞれの考え方でもって「大  
学の設立」を設定しているため、そ  
の点を踏まえつつ考え方を整理して  
大きく3つに分けることにした。す  
なわち、制度上の「大学」としての  
設立、制度上の「高等教育機関」と  
しての設立、各校が定めている「建  
学の時期」に則った設立である。こ  
の前提をもとに展示構成は5区分と  
することとした。I～IVでは各時代  
の創立に関する大学資料を壁面沿い  
の展示スペース内に示していく、中  
央ガラスケースとなるVでは「大学  
史のなかの学生たち」として異なる  
趣旨の展示を含めて見せることとし  
た。これらのはか、「その他」とし  
てもさらなる検討を行っている。現  
状ではアンケート結果をもとにした  
展示品候補をいくつか考えているが、  
今後は会員各校のご意見を再度お聞  
きしながら展示品についての調整を  
行っていきたい。

以上の西山氏の報告の後、会員各  
校から多くの質問意見が出された。  
「大学の設立」の考え方が具体化し  
てきたので追加のアンケートによっ  
てさらに資料提供を呼びかけること、  
会員校以外の大学の写真集・図録等  
から広く資料を検討してみること、  
展示物の規格等といった詳細をつめ  
ていくこと、といった点が話し合わ  
れて展示開催へ向けてさらに検討し  
ていくこととなった。（浅沼薰奈）

## 全国大学史資料協議会東日本部会規約

### (名 称)

第1条 本会は、全国大学史資料協議会東日  
本部会と称する。

### (目 的)

第2条 本会は、全国大学史資料協議会を構  
成する部会として、大学史に関する  
情報交換と研究、並びに会員相互の  
質的向上と交流をはかることを目的  
とする。

### (事 業)

第3条 前条の目的を達成するため次の事業  
を行う。

- (1) 大学史に関する情報交換
- (2) 史資料の収集、保存、利用に関する研究
- (3) 研究会（研修会）、講演会の開催
- (4) 会報等の発行
- (5) その他、前条の目的遂行に必要な事項

## (会員)

第4条 本会は、この規約の趣旨に賛同する大学・短期大学等の機関会員及び個人会員をもって構成する。

## (入・退会)

第5条 入会は、所定の入会申込書を会長に提出し、幹事会の承認を受ける。

- 2. 退会は、書面により会長に届出る。

## (名誉会員)

第6条 本会に名誉会員をおくことができる。

- 2. 名誉会員の推薦は、総会において行う。

## (幹事)

第7条 本会に次の幹事をおく。

- (1) 会長 1校
- (2) 副会長 2校以内
- (3) 運営委員 若干校
- (4) 会計委員 2校
- (5) 監査委員 2校

- 2. 前項の幹事を個人会員がつとめる場合、校を名と読み替えるものとする。

## (幹事の職務)

第8条 会長は本会を代表し、会務を掌握する。

- 2. 副会長は会長を補佐し、会長に支障ある時はその職務を代行する。
- 3. 運営委員は本会の運営につき審議・執行する。
- 4. 会計委員は本会の会計を担当する。
- 5. 監査委員は本会の運営・会計を監査する。
- 6. 幹事は、全国大学史資料協議会を構成する西日本部会幹事とともに、全国協議会の幹事会を構成し、その運営を協議・決定する。

## (幹事の選出及び任期)

第9条 幹事は総会で選出し、任期を2年とする。但し再任は妨げない。

## (会議)

第10条 本会に次の会議をおく。

- (1) 総会
- (2) 幹事会

## (3) 委員会

## (総会)

第11条 総会は、通常総会及び臨時総会とする。

- 2. 通常総会は、年1回開催する。
- 3. 臨時総会は、幹事会が必要と認めたとき、もしくは、会員の三分の一以上の要求があったときを開催する。
- 4. 総会は会長が招集し、議長は会員中から選出する。
- 5. 総会は、会員の過半数の出席をもって成立し、審議は出席会員の過半数をもって決す。可否同数のときは、議長の決するところによる。

なお、欠席届をもって委任状とみなすことができる。

但し、その場合、議決権は認めない。

- 6. 総会は、次の事項を審議する。

- (1) 事業計画及び事業報告
- (2) 予算及び決算
- (3) その他重要な事項

- 7. 総会における決定事項は、全国大学史資料協議会の総会に報告しなければならない。

## (幹事会)

第12条 幹事会の構成は、会長、副会長、運営委員、会計委員とし、監査委員は出席して意見を述べることができる。

- 2. 幹事会は会長が招集し、会の常務について審議する。
- 3. 議長は会長が務め、議決は三分の二以上を要する。

## (事務局)

第13条 事務局は、幹事の互選により選出された大学等におく。

- 2. 事務局は、会事務全般を担当する。
- 3. 事務局は、全国大学史資料協議会を構成する西日本部会事務局とともに、全国協議会事務全般を担当する。

## (委員会)

第14条 幹事会の会務執行上、必要に応じて委員会を設けることができる。

- 2. 委員会については、別に定める。

## (経費・会計)

第15条 本会の経費は、会費及びその他の収入をもってあてる。

- 2. 会費は、1機関会員につき年額20,000円、1個人会員につき年額5,000円とする。

3. 会費は、毎年7月末日までに、その年度分を納入しなければならない。年度途中において加入した会員は、その1ヶ月後までに納入することとする。

納入された会費は返却しない。

4. 会費を2年以上滞納した会員は、退会扱いとする。

(事業年度及び会計年度)

第16条 事業年度及び会計年度は、毎年4月1日から翌年3月末日までとする。

(決算報告)

第17条 決算報告は、監査委員の監査を得てその証明書を添付し、通常総会に報告する。

(規約の変更)

第18条 この規約は、総会出席者の過半数の賛同をもって変更することができる。

#### 付 則

1. 本規約の実施に必要な細則は、幹事会の議を経て定める。

2. この規約は1996年4月1日から施行する。なお、本規約の施行にともない「東日本大学史連絡協議会規約」は廃止する。

3. この規約は2000年4月1日から施行する。  
(第14条改正・追加)

4. この規約は2004年4月1日から施行する。  
(第6条(名譽会員)追加、以下条数変更)

(第7条幹事定数改正・顧問削除)

(第9条顧問削除)

(第10条部会削除、委員会追加)

(第14条分科会削除、委員会追加)

(第1条・第2条・第7条・第8条・第10条・  
第11条・第12条・第13条・第15条字句訂正)

5. 2004年5月19日総会の議決にもとづき、  
同年7月16日幹事会にて字句調整。

(第5条・第7条・第8条・第11条・第12条・  
第13条字句訂正)

6. この規約は2006年5月26日から施行する。  
(第11条総会定数改正)

7. この規約は2009年5月28日から施行する。  
(第4条字句訂正・第2項削除)

(第7条副会長校数変更および字句訂正・第  
2項追加)

(第8条監査委員字句訂正)

(第10条名称変更)

(第11条字句削除)

(第15条第2項個人会員会費額追加)

## おくやみ(訃報)

東日本部会個人会員の日露野好章さんが、2009年8月14日にご逝去されました。

日露野さんは、東日本部会の前身である関東地区大学史連絡協議会時代から東海大学資料室のメンバーとして役員を務められ、そして東海大学課程資格教育センターに移られた1998年からは個人会員として、一貫して協議会の活動に貢献されました。

謹んで日露野さんのご冥福をお祈り申し上げます。

## ご案内

全国大学史資料協議会及び同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記へご連絡ください。

### 【武蔵野美術大学・大学史史料室】

〒187-8505  
東京都小平市小川町1-736  
☎ 042-342-6091

### 【日本大学・総務部大学史編纂課】

〒102-8251  
千代田区五番町12-5  
☎ 03-5275-9628

### 【成蹊学園・史料館】

〒180-8633  
武蔵野市吉祥寺北町3-3-1  
☎ 0422-37-3994

## 会報編集

### 【神奈川大学・大学資料編纂室】

〒221-8686  
横浜市神奈川区六角橋3-27-1  
☎ 045-481-5661